
普通な君を取り巻く風

やまひつじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通な君を取り巻く風

【Nコード】

N8134L

【作者名】

やまひつじ

【あらすじ】

どこにでもいる普通の高校生。
と自分で思っている五十嵐五日。
しかし彼はこの世界に生まれたときから普通ではなかった。

脱線（前書き）

こんにちは。初投稿です。やまひつじと申します。
よろしくお願ひします

脱線

「一日目朝」

交通事故で人が死ぬとかいうのをよく聞くけど、実際に自分が轢かれそうになっても避けられると思っていた。

自慢じゃないが運動神経だって悪い方ではないし、動体視力もいい。判断力だってある。

車を避けるのなんて簡単だと思っていた。

しかし、自分の身が本当に危ないときは体が動かなくなるらしい。なるほどね。

そういうことか。

「プップー」と耳をつんざくような、クラクションが鳴り響く。

そう、自分に向けて。

「ヤバッ」

せいぜいこの場で喋れるとしたらこれくらいだった。

だってあと少しでひかれてしまうのだから。

どう考えてもひかれて大丈夫なサイズの車ではない。ダンプだもの。なぜこんな状況なのかと問われれば、それで急いでいたからである。今日は大事な用事がある。

それを「寝坊」という二文字の怪奇現象のおかげで、遅れそうになったからだ。

こういうときに限って普段交通量の少ない道路に車が通る。

こういうときにみんな轢かれるんだろっな。

大丈夫だろうと油断して。轢かれる。

人間みんなやることなすこと、だいたいは同じである。

そしてみんな同じように轢かれ、同じように死ぬ。

そう。普通なら。

しかし彼の場合普通ではなかった。

そして彼自身も普通ではない。

それは記憶に薄い13年前に起こったとある爆発事故きっかけであ

る。

彼の両親が封をしていた彼の中の「異常」。

外れるはずのない封は、彼自身を守るために自ら「封」を解き、「ふう」を解き放った。

それがある戦いの引き金になることも知らずに。

バンッと激しい轟音とともに風が吹き荒れる。

彼を轢くはずのダンプは、風に吹かれ、宙を舞い、10メートルくらい向こうにきれいに着地。

周りにあった物も例外なく吹き飛び、遠くに散らばる。

まるで突風でも吹いたように、嵐でもあったように、すべてが吹き飛んだ。

彼を中心に。

「へ？」

何が起きたか分からなかった。

しかし、そんなことを考えている余裕はない。

時計を見て焦る。

「急がなきゃ」

そう言い残し走り出す。

彼は周りの惨状を気にも留めず、行ってしまふ。

これが彼が普通ではなくなる、第一歩であったのに。

脱線（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

幼稚な文ですいません。

いちおう長くなる予定なのでよろしくお願いします。

交錯

「一日目〱朝」(街中)

「はあ、はあ、はあ、はあ」

激しい息遣いとともに、赤に変わる直前の信号を駆け抜ける少年がいた。

少年はポケットから取り出した携帯電話の画面を見てさらに焦る。

「やべえ。間に合わねえ。」

そう言ってまた、向かい風の中を走り出す。

「同日〱同時刻

「プルルルルルルルルルルルル」

と、狭い暑苦しい車内で電話の呼び出し音だけが男の持つ携帯電話のスピーカーから漏れている。

「ガチャ」と音がした。どうやらつながったようだ。

「支部長。鍛冶山です。」と上司に電話のようだ。

「先ほど《力》を持った者を見つけました。」
と二人にしかわからないことを言っている。

「相当強い力を持ったものだと思います。ダンプを吹っ飛ばすくらいなので。」

電話の向こうで驚きの声が上がった

「はい、おかげで積んでいた新型の探索機が壊れてしまいましたけど。まあ支部に入って、働いて返してもらえばいいでしょう。はい。では」

と言って男は電話を切った。

「水野さあくん。」と少年は街中だというの大声を出した。

「ごめん。待った？」と息を切らしながら聞いた。

「もう、遅いよ五十嵐君。十分遅刻。」と可愛い頬を膨らまして少しいじけるように怒った。

「可愛い」とつい声に出してしまった。

「ん？なんか言った？」

「うっん、何にも。じゃあ行こっか。」と歩きだすと聞き覚えのあの声が耳に飛び込んできた。

「おせえぞ、いっちゃん」

「え？」

「そうそう、遅いよ。五日」

「え」

「遅刻は相変わらずだな、五日」

「ええ〜!？」

一瞬驚いたがすぐにその驚きは怒りに変わった。

「涼平、来太、夏樹!? お前ら!何でここにいんだよ」

確かにいつも遊ぶ人員としてはおかしくない。全員幼馴染だし。

しかし。しかし、今日は水野さんと二人きりだったはずだ。それなのになぜ!？

「愛花が誘ってくれたんだもん」とおちゃらける夏樹。

「何イ!？」

「だって大勢の方が楽しいでしょ？」と笑う水野さん。

駄目だ。この方。わざわざ二人きりの時に誘った意味を理解していらっやらない。

「は。ははは。そうですね」必死に泣くのをこらえる。

畜生。二人きりだと思ったのに。

「さあ、行こー」とみんなで遊園地に向かった。

もう楽しむ気力なんてあんまりなかったけれど。

「同日、十分前」

その男は電柱の上に体育座りをしていた。

服装はさながら忍者。

そして彼の額には「鬼」の一字が刻まれている。

「さて、そろそろですかねえ。」

と男は立ちあがり、事前に用意していたダイナマイト付き手裏剣を取り出した。

すると向こうから一台の車がやってきた。
そのはなぜか、スモーク張りだった。

「あれですね。」忍者姿の男はダイナマイトに火をつけ、車に向かって思い切り投げた。自分まで電柱に落ちそうになったがなんとかこらえる。

「今回の仕事はこれだけですか。簡単すぎですね。」と独り言をいったその時だった。

突如、突風に吹かれ電柱から落ちるところではなく、30メートル先まで飛ばされてしまった。

しかし、さすがは忍者というべきか。音も立てずに着地。すぐさま飛ばされて場所まで戻る。

と一人の少年が走っていくのが見えた。

「仕事は終わってませんが、こっちの方が重要ですね」と少年を追いかけて行った。

娯楽

一日目「昼」

「いやあく楽しいな。コーヒーカップ」と嫌味ったらしく、三人に言ってみた。

「最悪」「お前は鬼か!?!」「死ね!!」などと雑音が聞こえなくもないが無視する。

「ごめんね、水野さん。暇だったでしょ?」

「ううん。大丈夫だよ」と笑った。

可愛い。さすがに二回も口には出さない。

「あたしたちは大丈夫じゃないけどね(怒)」「とこちらを睨む。

そう。いま水野さんを除いた三人を>洋風目玉おやじの刑くに処していたところなのだ。

刑の詳しいことは置いて、なぜそんなことをしたかというところも語るまでもなくただの憂さ晴らしである。「ほんと水野さんと二人……」とまだ三人ことを恨んでいた。

「気持ち悪っ。ちょっと俺トイレ。」「俺もだ」「あたしも」

と刑に処された三人はトイレに向かった。

これでやっと二人きり。

と、ベンチに座っていた水野の横に腰掛ける。

「どうしてあんなにカップまわしたの？」とやはり水野は訪ねた。

当然と言えば、当然だろう。安全装置が稼働するくらいまでハイスピードで回したのだから。

「ああみんながもつと回せっていつから」

完璧嘘である。しかしその嘘を指摘するものは今は居ない。

「水野さんそれ何？」と五日は彼女の首から出てくるものについて尋ねた。

「ああ、これは先祖代々受け継がれてるお守り。」

「危ないときには助けてくれるんだって。ほら私この間16になつたでしょ？」

「そのお祝いつてこと？」

「そゆこと」といつて微笑する。

五日がなぜ幼馴染の水野をさん付で呼んでいるのかというと、それはもうおわかり。五日は水野が好きだから。呼び捨てにはできないのである。

本当は下の名前で呼びたいのだが、それは叶わぬ願いだった。

「そのお守りってどのくらい前から受け継がれてるの？」

「うーん100年前くらいだから、おじいちゃんのパパさんくらい

かな？」

「百年かぁ」短いようで長い百年。といったところでお昼の放送である。

昼は園内の飲食店が混雑するから、早く食べる。みたいな内容だった。

「おなか空いたね」水野は自分の腹を叩いてつぶやく。

「じゃあ、俺なんか買ってくるよ。そこで待ってて。」

「うん。わかったあ」いつてらっさ〜いと水野は手を振る。それに笑顔で返し売店へ向かった。

「同日、昼」

「遊園地か、懐かしいな」

宅急便屋さんの恰好をした男が、つぶやく。

「さて、>鬼人会くのやつらに気づかれる前にさっさと済ませるか。」

男はそう言って大人一枚のチケットを買い入園した。

「これが遊園地。初めて見ました」と額に鬼の文字が刻まれている男はつぶやく。

「暢気なものですね。こっちは>開発<で休みなんてほとんどないのじ」

そういつて男もまた遊園地に常人では不可能な壁を走るという方法で潜入した。

「お待たせ〜ってアレ？」両腕にホットドックを抱えて戻ってきた五日はそんなことをいう。

「みんなまだ戻ってないの？」

「そう。電話もつながらないの。」
「そりゃそうであろう。」

多分みんなリバースしている。
あれだけまわして吐かなかつたやつは居ないのだ。

ついでに言うつと五日は幼いころ父親に振り回されたので大丈夫という特異体質なのである。

「じゃあ男子トイレみてくるから。これ持ってて。」と人数分のホットドックを渡す。

「さてトイレはあっちか」

とトイレへ向かう。

とその途中だった。

「すみません」と声をかけられた。

「はい？」男は奇妙な格好だった。忍者か？

「私、鬼ちゃん製薬の佐原と申します。」

「僕に何か？」

「はい、簡単に言いますと、新しく作った洗剤のCMに出てくれませんか？」

どういうことだろう。顔も背丈も普通の僕にCMの誘いなど。

「あなたが探していたイメージの人にぴったりなんです。」

なるほど。鬼ちゃん製薬は確かに人気がある。

ここらでは一番大きい製薬会社である。

「それで、出演していただけないでしょうか？」

別に断る理由もないが、面倒なことは嫌いなので断ることにしよう。

「すみません。そういうのはちょっと。」

「お話だけでも聞いて下さいませんか。」

しつこいな。こういうのはきっぱりと

「急いでるんで！」と言って逃げるようにトイレへ向かった。

トイレ内には案の定リバーズ音が響いていた。

「二人とも大丈夫かあ？」

「朝ごはん全部出た。」「俺もだ。」

少しやりすぎたか。

まあいいか。

「さっきのところに居るから早く戻ってこいよ。」

「頑張る」とよわよわしい返事が返ってきた。

「じゃあ俺は戻ってるから。」と言いつつ、五日はベンチへ向かった。

一番吐いていたのは、涼平だった。

「涼平。大丈夫か？」と来太は聞く。

「うん、もすこしで出る」

「そうか」来太は携帯電話を開くともう一時すぎであった。とりあえず五日に連絡をと思ったところで。

「ザザッ」と来太の背後から音がした。

「ん？」と後ろを向こうとしたが、その前に首のあたりに激しい痛みを感じ、そのまま意識を失う。

「ん？どうしたの。来太？」とドアを開けると何やら、黒いものが見えたが、視認はできなかった。

それを確認する前に同じく首を、打たれ意識は失う。

そしてトイレに残ったその一人はつぶやく

「まったく。勧誘を断られたのは初めてです。得意の話術を披露する前に逃げるなど、この上ない屈辱!!」

と憤っている。

「さて、後は女の子二人ですね。 > 鬼人会くの恐ろしさを思い知らせてやりますか」と笑いながら、二人を抱えてトイレを出た。

誘拐

「水野さん、悪いけど夏樹の様子を見に行ってきた？」

トイレから戻った五日は、水野の持っていたホットドックを受け取りそうだった。

さすがに女子トイレに入るわけにもいかず、かといって外から呼びかけるのも気がひけたので水野に頼むことにした。

「あ、うん。じゃちょっと行ってくるね。」

「よろしく。」

そう言って五日はベンチに腰を下ろした。

「夏樹？大丈夫？」

と声をトイレに声をかけてが返事がない。

どうしたのかとトイレをのぞいてみる。

「!?!」

水野は目を疑った。

トイレに居たのは夏樹でもなければ、一般の女性客でもない。
忍者姿の男であった。

忍者男の足元に一人の女性が倒れている。
薄暗いトイレの奥を目を凝らしてみると、奥の方にも二人の男性が倒れている。

「夏樹!? 来太!? 涼平!?!」

水野もよく知る三人だった。

「おや? おやおや? 見つかってしまいましたか。」
と男は面白そうに喋る。

「あなた誰ですか!?! どうしてこんなことするんですか!?!」

水野の怒声がトイレに響き渡る。

「うるさいですね。まあ探す手間が省けてよかった。というべきなのでしょうか?」

と男は夏樹を荷物のような扱いで来太達の方へと投げる。

「さて、あなたにも着いてきてもらいますよ。大事な>餌くなんですから。」

と愛花を舐めまわすように見る。

全身に悪寒が走る。この人は危険、と頭が警報を鳴らす。

しかし友達を見捨てるわけにはいかない。

水野はそばにあったモップを構える。

「み、みんなから離れるおおお。」

男に向かって、突進する。

男は水野の行動に少しは驚いたものの、一般人に不意打ちされるような人間ではない。

「友達っていったいなんなんでしょうか。逃げればいいのに。向かってくるなんて。友達なんていなければ。逃げられるのに。やっぱり友達なんて。」

ゴミより不必要だ。と吐き捨て、水野の後頭部を死なない程度に打つ。

水野の意識が遠のく。平衡感覚がなくなる。前が見えなくなる。後頭部の痛みさえ薄れていく。そしてゆっくりと深い闇の中へ……

「五日、くん」

「さて、これで全員ですね」

と男はまた笑い、四人を抱えてトイレを出る。

勧誘

遊園地を出たところで足を止め、息を整える。

目的地は五日の家からも、遊園地からも、そう遠くはない「釣り堀」。

今日は一日。釣り堀は定休日のはずだ。

呼ばれる相手が相手だからそう不思議でもない。むしろ向こうにあって好都合であることに違いはない。

「なんでみんなが……?」

五日を除く四人は遊園地で攫われてしまった。

何のために? 「電話をかけてきた者は取引のため」とだけ答えた。

まったく意味が分からない。友人と遊んでいただけなのにどうして友人は攫われるのだろうか。なぜ自分だけを残して? 誰が? 何のために? どうやって?

五日の頭には疑問符がたくさん浮かび上がった。

しかし考えて解決するものではない。

まずは釣り堀へ急ぐことにした。

釣り堀の正面の大きな門は定休日だと言うのにあいていた。
もちろん客など一人もいなかったが。

入ってすぐ横は正方形の水槽でその周りをいすが取り囲んでいる。

対して左側は駐車場兼駐輪場となっており、釣り堀屋のおじさんの
車が一台止まっているだけで、他は何もなく閑散としている。

足元には昨日の強風で散った桜の花びらで埋め尽くされている。

そして正面。釣りの餌などを売る一階とおじさんが住む二階で構成
された築70年の木造の家が建って、建って、

「おじさんの家がない!？」

そこにあっただのは大量の木片や瓦。

そしてそこに立っていた元家の入口のあたりに……………
。。

男は居た。来太、涼平、愛花、夏樹を順に自分の尻に敷いて。

その横にはおじさんが倒れている。

「ッー！」

五日はブチ切れる寸前だったが、ここで冷静さを欠いては駄目だ、と自分を落ち着かせる。

そしてゆっくりと息を吸い尋ねる。

「で、僕に用ってなんですか？」

「あなたを《鬼人会》に勧誘しようと思って。」

その男は立ち上がりながら言った。

「私の名前は霧島赤也。《鬼人会》所属でこうやってあなたのような人を見つけては《鬼人会》に勧誘している、いわばスカウトマンです。」

と、五日に近寄り名刺を差し出してきた。

「《鬼人会》というのはですね、」
と語り始める。

「研究所みたいなものでして、《力》を持った者の体を調べたりして、その《力》を実験に使ってみたりして、未来に役立てようとする会です。どうです？ 素晴らしいでしょう？ あなたの《力》が未来の役に立つのです。あなたが入ればきつと未来では多くの人が救われるでしょう。それに給料もとってもいいんですよ。お小遣い稼ぎにしては高すぎるくらいに。」

そして男、霧島は曇天の空に向かって叫ぶ。

「さあ、あなたも《鬼人会》に入り、その力を未来のために、そしてわれらの野望のために。」

「野望？」

「はい。《鬼山財閥》ご存知ですよね？」

鬼山財閥と言えばこの国で一番の財力と権力を持っている。

「研究の成果を生かし、世界に進出。そして征服します。」

「思ったことはありませんか？この世界には愚かな人間がたくさんいます。犯罪を犯す人間。私欲のためなら人殺しまでする人間。戦争を続ける人間。世界にはまだまだ愚かな人間がたくさんいます。くだらないと思いませんか？たとえば戦争。これの一番の被害者は子供なのです。未来がある子供の命を簡単摘み取ってしまう。そんな愚かな人間がこの世にいてもいいんですか？」

「そんな世界ならいつそのこと征服すればいい。そうすれば戦争はなくなりません。愚かな人間を殺せば、飢餓で苦しむ子供にも食糧が回せます。愚かな人間がいなければ、みんな幸せ。幸せなんです。その幸せのためにも。」

「《鬼人会》へ！！！」

開会

「話はそれで終わりですか？」

「ええ」

と男は満足げに答える。

「じゃあ僕はそのやつら連れて帰りますんで。」

「待って下さい。鬼人会には入ってくれますよね？」

「入りませんよ。世界征服ならどうぞ勝手にやってください。」

そう言つて愛花達の方へ行こうとした時だった。

霧島はポツケに手を突っ込み、夕日を反射させきらきらと輝くあるもの取り出し五日にそれを向けた。

「待って下さい。それじゃ困るんですよ。あなたには鬼人会に入ってもらわなければならないんです。」

「何のために？」

「世界のために。」

そこまで聞いた五日は大きなため息をついた。

「鬼人ナントカには入りません。友達を返して下さい。」

「困りますねえ。入っていただかないと。せつかくの研究材料なのにもつたないじゃないですか。」

「それに！！」霧島はいきなり声のトーンを変え、言った。

「あなたのお友達がどうなるか分かりませんよ〜??」

気絶している夏樹たちの上で夕焼けで輝くナイフをぶらぶらさせる。

「おい！やめろ！！」

この人ならやりかねない。五日は直感した。

「おい。何をしてるんだ??」

と不意に後ろから声をかけられた。

驚いて後ろを振り返ってみると、パトロール中であろう二人組のお巡りさんだった。

「おい。どうしたんだ。」

「あいつナイフを持ってるぞ。」

警官もどうやら状況がヤバいことくらいは分かっただらしい。

警官は慣れた手つきで拳銃を取り出し霧島に向ける。

「ナイフを捨ててその子たちを解放しなさい。」

霧島は自分に拳銃が向けられているのに笑っていた。

「やめて下さいよ。それが当たったら。」と言いながら右手を上げた。

「痛いじゃないですか。」と叫んだ。

その瞬間、魚が入っていて、緑色に濁っている水槽の水が宙に浮かび上がり警官二人の方へ飛んで行った。

「バシヤン」と水は警官の顔に当たりそのまま顔を覆い尽くした。

「ぶばあ、ボゴベへば。」と警官はもがいたが水は顔から離れずとつとつ倒れてしまった。

「お、おい！どうした？！」ともう一人の警官が慌てふためく。

「あなたもうるさいですねえ。」霧島はにやりと笑い上げていた右手を立っている警官に向けた。

すると警官の顔に張り付いた水はもう一人の警官を襲い、同様に警官をおぼれさせてしまった。

「やれやれ。とんだ邪魔が入りました。」と右手を下げると警官を襲った水は、そのまま重力に従い、地面をぬらす。

「これが私たちが研究してる力の一つです。あ、そうですね！」霧島は何か思いついたと言わんばかりに手のひらを叩く。

「これをあなたが見たからには、鬼人会に入るか、死ぬか。どちら

かしがありません。死ぬのは嫌でしょう？でもあなたは鬼人会には入りたくない。ならゲームをしましょう。あなたが私と戦って勝ったら、お友達を返します。二度と勧誘もしません。勝てばあなたにはいいことづくめです。」

「本当に返してくれるんですか？」

「もちろん。ですが私が勝ったら鬼人会に入ってもらいます。ああもちろんさっきみたいな《力》は使いませんよ。圧勝しちゃいますからね。どうですやりますか？」

.....

警官二人が何もすることができずやられてしまった相手に自分は勝てるのだろうか？もしかしたら自分も同じ目にあうかも知れない。という恐怖心に五日は駆られた。しかしゲームをしなければ、ゲームに勝たなければ、愛花達は戻ってこない。やるしかない。自分がやってやる！！。

「分かりました。ゲームに乗ります。」

「そうですか。では早速始めましょう。あああなたは《力》使ってもいいですよ。どうせ操れないだろうし。他に質問はありますか？」

「ないですよ。」

「では楽しい楽しい《ゲーム》の開幕です。」

「うおおおおおおお」

夕焼けが地平線に沈もうとするのと同時に五日は霧島に突撃した。

開戦

最初の一撃。

五日は霧島の顔に右ストレートを繰り出す。

しかし、霧島の左手で軽く外側にはじかれ、拳は空を切る。

勢いで体から突っ込んでくる五日を体を一回転させ避け、その回転を利用し、五日の腰のあたりに蹴りを入れる。

前につんのめり、顔面から地面に突っ込みそうなところで、すかさず前転をして衝撃を分散させる。

「喧嘩なんて久しぶりだな。」

「おやおや、少しはやりませぬ。」

今度は霧島から攻めてきた。

すり足で距離を詰め、フロントキックをする。

両手を交差させて防御するが、腕が痛かった。

霧島は五日が防御でひるんだ一瞬の隙を突き、左手でパンチを繰り出す。

防御はしない方がいいと判断した五日は頭を左に反らして、拳をかわず。

そしてがら空きになった霧島の右胸を狙い拳を出す。

しかし霧島の右手に腕を掴まれ拳は止まり、体がふわっと浮いたかと思うと、五日の視界は反転した。

一瞬何が起きたか分からなかったが、背中や頭に激痛が走り、投げられたと自覚する。後頭部を打ったせいかな、立ち上がると吐き気が

した。

「くそっ」

「大丈夫ですか？降参もありですよ。間違っても無理して死なないで下さいね。うっかり死んでもらわれると怒られるのは僕なんですから。」

「降参なんかするかつ！」

「そうですか。それは残念。」

と霧島は肩をすくめる。

辺りがだんだん暗くなってきた。

五日は一度深呼吸をすると、霧島に接近しまた右拳を放つ。

あっさりと避けられるが続けて左拳を出す。これも右手で受け止められてしまう。

五日はすかさず、止められた拳を引き戻し、さっきまで五日の拳を掴んでいた霧島の右手の手首をがっしりつかむ。

五日はその場で足の裏を霧島に見せるように体を傾け、膝を曲げてジャンプする。

そして五日の足の裏が霧島の顔と同じ高さになった。

五日は足を伸ばし霧島の顔に蹴りを入れようとす。それと同時につかんでいた霧島の右手首を引っ張った。

霧島の顔は吸い寄せられるように五日の足の裏に当たり、霧島は後ろに倒れる。

霧島の歯がいくつか地面に落ちている。

今のは結構効いたはずだ。

「はあはあ。これで、はあはあ。どうだ！」

霧島から返事はなかったがむくりと起き上がってきた。

「はあ。結構やるんですね。じゃ。」

「本気出してもいいですね。」

と言った途端、霧島の動きは激変した。

体制を低くして、一気に距離を詰め、右拳を五日の腹にめがけて出す。

とつさに防御するが後ろに一步よろめく。

「隙有り」

うれしそうに言いながら左拳を五日の額に叩き込む。さらに後ろによろめく。

霧島はすかさず五日の背後にまわり背中を膝で蹴る。

「がはっ！」

背骨に鈍い痛みが走る。

「まだまだです。」

今度は後頭部にハイキックをしてきた。

視界はぶれ、脳が揺れる。

霧島は五日の正面戻り、前に倒れそうになる五日の顔面を蹴り上げた。

五日の体は棒のように一直線で無防備で、一番衝撃を逃がしにくい体制になる。

トドメとばかりに霧島はドロップキックを五日の腹に決める。

「ぐはっ。」

二メートルくらい後ろに吹っ飛び、固く冷たいアスファルトに体を削られる。

口の中は血の味がする。腹を蹴られて吐き気もする。視界が霞み、体が言うことを聞かない。聞いてくれない。

「おや、ちよつとやりすぎましたね。」

霧島は抜けた自分の歯を拾いながら言った。

「これであなとも鬼人会への入会決定ですよ。おめでとうございませう。」

ふざけるな、誰が入るか。と言いたいが口も痛みであまり動かせない。

「さつてと、あなたは車に乗せるとして、このお友達とおじさんはどうしましょうか。殺しちゃいますかねえ。」

と拾った歯をティッシュにくるんで、ポケットにしまいながら言う。

「まあ、下のものに処理させればいいですかね。」

霧島はポツケからキーを取り出し、車のドアを開け、エンジンをかけた。

「自分で歩けますか？ああ、無理ですね。仕方ない。」

霧島は五日を肩に担ぎ、もう片方で電話をしていた。

「鷺町の釣り堀《池田屋》のやつを片づけておいてください。急いで下さいね。気絶してるだけですから。」

愛花達はもうすぐ処理されるらしい。

霧島の部下はすぐ近くに待機していたのか、電話をしたあとすぐに一台のバンが来た。部下が二人出てきて愛花達を運ぼうとする。

五日も車に運ばれ、みんなとの距離が遠ざかる。

「ちくしょう。」

クソ、ちくしょう！なんで。なんでみんなが。俺のせいか？

俺が悪いのか？

みんなを守れなかった俺が悪いのか？

だったら俺一人でいいじゃないか。

なんでみんなが処理されるんだよ！

おかしいだろ。

おい。やめろ。みんなどこに連れてく気だ！やめろ。やめろよ！

大事な親友たちなんだ。返せよ。連れてくなよ！。やめろ。やめろ！

「やめろおおおお！！！」

体の力を振り絞り、叫んだ。

すると、五日の体の周りから風が巻き起こった。

五日が霧島の手から離れる。

五日が霧島の部下を強く睨み、強く叫ぶ。

「俺の親友に手を出すなっ！」

突如、五日の体から突風が吹きだし、霧島の部下を吹き飛ばす。

愛花達がドサツと地面に落ちる。

「みんな！」

地面に落ちた親友に駆け寄る。

目立った怪我はないようだ。

安心したが、すぐに後ろに向き直る。

「素晴らしい。素晴らしい力だ。」

「ふざけるな！人の親友に何してんだ。」

「処理しようとしただけですが？」

呆れた。霧島は人を処理して当然のような口ぶりだ。

「もう許さねえ。ぶっ飛ばしてやる。」

「そうですか。それは楽しみです。」

辺りはもうすっかり暗くなっていた。

追走

太陽は沈み、暗くなってきた道を走っているある男がいた。

その男は宅急便屋さんの恰好をしているが服のあちこちが破け、その下にはいくつかの擦り傷が見える。

「急いで下さい。彼がやつらの仲間になってしまったら。取り返しのつかないこととなります。」

「分かつてる。次どつちだ？」

「次の角を左、その次は右。あとは直進。一キロメートル先に《池田屋》があります。」

「人払いは済んでいるのか？」

「はい。しかし《池田屋》には釣り堀の管理人が一人。

鬼人会の者が一人。

奴らが運んできた人が四人。

通りかかった人が五人います。

通行人のうち三人と奴が連れてきた四人、四人を連れてきた奴が一人。

計八名は一般人とは出している波長が違うことから、《能力者》だと思われませぬ。」

「何？そんなにいるのか？」

「はい。通行人のうち二人はおそらく奴らでしょう。波長が《鬼人会》のものです。」

「敵は三人か。少し厳しいかもしれないな。」

「いえ。奴らが連れてきた四人と通行人の四人は気絶している可能性が高いです。先ほどから動きがまったくと言っていいほどありません。」

「じゃあ残っているのは？」

「最初に来た鬼人会の奴が一人。その次に来た一人です。」

「その人の波長の種類は？」

「《風》です。」

まだ無事だった。それが分かった宅急便屋さんの男。鍛冶山は走る速度を上げた。まだ間に合う。そう思ったから。

「分かった。もうオペレーションが必要ないから切るぞ。」

「待って下さい。二つほど連絡事項があります。」

「一つ目は《風》の波長をもつ者の能力値が先ほど急上昇したこと。」

「またか。まだコントロールはできてないのに。危なっかしいな。早くしないとまた事故起こるな。」

「それが鍛冶山さん。少し釣り堀に着くまで時間がかかるかも知れません。」

「先ほどから、鍛冶山さんを追跡している者がいます。」
「なに？」

「失礼。正確には者と獣です。」
その言葉を聞いて途端、鍛冶山は足を止め、後ろを振り返る。

「グルルルルル。ハッハア。」
激しい息遣いの獣がそこにいた。

まるでライオンとチーターを混ぜたような獣が、そこにいた。背中には一人の人が乗っけている。

そして獣の額には《鬼》の文字が刻まれている。
「人払いが裏目に出たな。鬼獣出してくるなんて。」

と鼻で笑う。
「はい。そうですね。時間がありません。すばやく殲滅してください。」

「さらっと、難しい注文をするなあ。」

「あなたであれば可能でしょう？」
オペレーターがフツツと笑う。

「じゃあもう切るぞ。」
「はい。では。」

ブツツと電話が切れる音を確認すると獣の背中に乗っているもの

が喋り始めた。

「いやあ、いやあ。あなたが《エクセル》の鍛冶山さんですか。こんなにちわ。私は、」と名刺を出そうとする。

「うるさいぞ」

「え???」

男のハテナは三重。

一つ目は名刺を出している間に目の前から鍛冶山が消えていたこと。
二つ目は自分が乗っていた獣がいつの間にかバラバラになっていたこと。

三つ目は自分の心臓から鉄の剣が生えていること。

「があ!?!」

いつの間にか、男の背後にいた鍛冶山は剣を引き抜き、男の胴体を一閃する。

上半身と下半身が別れてゆく。

「お前と遊んでる暇はない。」

鍛冶山はそう言い残し、また釣り堀へと走り出した。

反撃

荒々しい風が吹く釣り堀で五日と霧島は立っていた。自転車くらいなら簡単に倒せるくらい風の力が釣り堀には吹いている。

霧島は立っているのがやっとだった。

ランダムに向きの変わる暴風の中で立ち続けられるものはそうはいない。

「なんだ、この感じ。」

先ほどまで全身が痛かったのにそれが嘘のようになくなった。

傷は癒えているわけではない。これがアドレナリンって奴だろうか？先ほどより体が軽い。

この調子ならあいつに勝てるかもしれない。

「おい。勝負はまだ終わってないよな？」

強い風の中で霧島に大声で問いかける。

「ええ。あなたが倒れるか、降参するまではね。」

自信たっぷりな感じで言ってきた。

霧島が負ける、という選択はないらしい。

ふう。と深い深呼吸をして再び霧島に接近する。

足元に落ちていた桜の花びらは風にさらわれ飛んでいく中を全速力で。

「だあああ。」

声を張り上げ、霧島の頭を狙い拳を突き出す。

ぐるりと霧島は身をよじり、拳を避ける。

五日は思い切り踏ん張り、勢いを無理やりなくし霧島に向き直る。

先ほどと同じように五日の背後を狙った蹴りを両手で受け止め、そのまま一回転させ、ブン投げる。

「あれ、俺こんな力持ちだったっけ？」

気づけば10メートルほど霧島は飛んでいた。

固く冷たいアスファルトが霧島の背中を削る。

「うう。痛いですね。」

五日はまた霧島との距離を詰める。

速い！

本当に自分で走っているのか不思議なくらいのスピードが出た。

まるで追い風の中を走っているようだった。

霧島の胴体を狙い殴りかかるが、霧島は両手を合わせ五日の拳を受け止める。

ザザザ、と霧島が後ろにずれる。

「ぐうう。」霧島の短いうめき声が聞こえた。

霧島がひるんだ隙に五日は膝蹴りを腹に決める。

「ぐはつ。」

霧島の脇をすり抜け、背中を肘で突く。

そりかえった背中にパンチを入れる。

霧島は前に倒れそうになるが、なんとか踏みとどまりこちらを振り返る。

地面を蹴って、距離を縮め五日の顔に拳を放つ。

それを両手で受け止めてパンチの勢いを利用し背負い投げをする。

地面にたたきつけられた霧島をトドメと言わんばかりに思い切り、全力でふんづける。

霧島は短いうめき声と共に意識を失った。

急行

太陽は沈み、暗くなってきた道を走っているある男がいた。

その男は宅急便屋さんの恰好をしているが服のあちこちが破け、その下にはいくつかの擦り傷が見える。

「急いで下さい。彼がやつらの仲間になってしまったら。取り返しのつかないこととなります。」

「分かつてる。次どつちだ？」

「次の角を左、その次は右。あとは直進。一キロメートル先に《池田屋》があります。」

「人払いは済んでいるのか？」

「はい。しかし《池田屋》には釣り堀の管理人が一人。

鬼人会の者が一人。

奴らが運んできた人が四人。

通りかかった人が五人います。

通行人のうち三人と奴が連れてきた四人、四人を連れてきた奴が一人。

計八名は一般人とは出している波長が違うことから、《能力者》だと思われませぬ。」

「何？そんなにいるのか？」

「はい。通行人のうち二人はおそらく奴らでしょう。波長が《鬼人会》のものです。」

「敵は三人か。少し厳しいかもしれないな。」

「いえ。奴らが連れてきた四人と通行人の四人は気絶している可能性が高いです。先ほどから動きがまったくと言っていいほどありません。」

「じゃあ残っているのは？」

「最初に来た鬼人会の奴が一人。その次に来た一人です。」

「その人の波長の種類は？」

「《風》です。」

まだ無事だった。それが分かった宅急便屋さんの男。鍛冶山は走る速度を上げた。まだ間に合う。そう思ったから。

「分かった。もうオペレーションが必要ないから切るぞ?」

「待って下さい。二つほど連絡事項があります。」

「一つ目は《風》の波長をもつ者の能力値が先ほど急上昇したこと。」

「またか。まだコントロールはできてないのに。危なっかしいな。早くしないとまた事故起こるな。」

「それが鍛冶山さん。少し釣り堀に着くまで時間がかかるかも知れません。」

「先ほどから、鍛冶山さんを追跡している者がいます。」
「なに?」

「失礼。正確には者と獣です。」
その言葉を聞いて途端、鍛冶山は足を止め、後ろを振り返る。

「グルルルルル。ハッハア。」
激しい息遣いの獣がそこにいた。

まるでライオンとチーターを混ぜたような獣が、そこにいた。背中には一人の人が乗っけている。

そして獣の額には《鬼》の文字が刻まれている。
「人払いが裏目に出たな。鬼獣出してくるなんて。」

と鼻で笑う。
「はい。そうですね。時間がありません。すばやく殲滅してください。」

「さらっと、難しい注文をするなあ。」

「あなたであれば可能でしょう?」
オペレーターがフフッと笑う。

「じゃあもう切るぞ。」
「はい。では。」

ブツツツと電話が切れる音を確認すると獣の背中に乗っているもの

が喋り始めた。

「いやあ、いやあ。あなたが《エクセル》の鍛冶山さんですか。こんなにちわ。私は、」と名刺を出そうとする。

「うるさいぞ」

「え???」

男のハテナは三重。

一つ目は名刺を出している間に目の前から鍛冶山が消えていたこと。
二つ目は自分が乗っていた獣がいつの間にかバラバラになっていたこと。

三つ目は自分の心臓から鉄の剣が生えていること。

「があ!?!」

いつの間にか、男の背後にいた鍛冶山は剣を引き抜き、男の胴体を一閃する。

上半身と下半身が別れてゆく。

「お前と遊んでる暇はない。」

鍛冶山はそう言い残し、また釣り堀へと走り出した。

覚醒

勝った。

そう思った。そう確信した途端、足に力が入らなくなった。ドサツッと地面に座り込む。霧島という危ない奴を倒すことができたこと。

みんなが無事だったこと。それだけ分かれば五日は安心できた。しかしこいつはなんだったのだろう。

戦争とか平和とか愚か者とか。誇大妄想狂なのだろうか。

それにあの水を操っていたのが一番の謎だ。

何のトリックもなかったように見える。

ほんとに宙に浮いているそんな風にしか見えない。

あのお巡りさん、おじさんは生きているのだろうか。

近くまで言っただ確認したかったが、やはり全身が痛い。

特に顔と肋骨のあたり。

思いつきり喰らったからな。骨とか折れてるかも知れない。

霧島って奴死んでないよな？もし死んでたら俺捕まるのかな？

いや、正当防衛か？あいつ水を操ってたし、ああでも信じてもらえないだろうな。水なんて普通に操れないもんな。どんなトリック使ったのか分かるまでは自由になれないかもしれないな。あ、でもナイフもあるな！。アレ証拠品になりそうだな。脅しとはいえつかつたしな。あとはまあお巡りさんが死んでなければ証言してくれるから大丈夫だな。

ポツリ。

うん？雨かな？おかしいな。今日降るなんて天気予報で言ってたか？本格的に降る前に帰らないとな。

どうやって帰ろう。あんま歩く元気ないし。家に電話して車できてもらうか？

ごそごそとポケットから携帯電話を取り出すと、液晶が割れていた。

一瞬自分の目を疑う。

しかし壊れた携帯電話は夢でも幻想でもなく現実だった。

あ、どうしよう。最近変えたばっかなのに。

仕方ない面倒だけど、近くに交番あるからそこで事情話した方がいいな。

けが人もいるわけだし。

「よっこいしょっと。」

立ちあがると少し立ちくらみがした。

雨が少し強くなっている。

早くしないと俺もみんなも風邪ひいちゃうな。

釣り堀の出入り口に向かって歩き出すと、一人の人物が釣り堀内に入ってきた。

あ、昼間の意味不明な宅急便屋さんだ。

何かこつち見た瞬間顔が険しくなったな。ん？何してんだあの人？釣り堀に入ってきた宅急便屋さんは入口にある鉄格子の半分を《池田屋》と書いてある石柱から引っこ抜いた。

やっぱりあの人頭はおかしいのかな？いちおう注意してあげた方がいいかもな。

「はああ！！！」

という掛け声とともに宅急便屋さんは鉄格子の一部を変形させた。

え？なんか今鉄格子変形しなかった？

あーなんか手に持ってる。

なんか尖ってるな。危な。

宅急便屋さんはその手にある尖った物を思いっきり五日の方へ投げてきた。

「うわあッ」

思わず顔の前で手を交差させ、しゃがみこんだ。

バチャン。

水を叩いた時のような音が背後でした。

嫌な予感がする。

嫌な予感しかしない。

恐る恐る振り向くと、たった今宅急便屋さんが投げた物が空中に、否、空中にある水中に浮かんでいた。

その奥には霧島が立っている。まだ動けるのか！！

「そいつから離れる！！」

体が一瞬硬直するがなんとか動かない体に鞭を打ち、霧島から離れた。

さっきまで五日がいた場所が濡れていて、釣り堀にいたはずの魚がぴちぴちと跳ねている。

「大丈夫か？」

「はい。」

隣にいる宅急便屋さんは五日が無事だと分かると、霧島に向き直り、さっきの鉄格子の残りを強く握り、また変形させた。

「あなたと言い、あの人と言いななんですか。マジシャンなんですか？」

「説明はあとだ。とりあえず今は奴に集中しろ。」

「……………はい。」

「さっきは名乗り忘れてたけど僕の名前は鍛冶山、鍛冶山徹だ。」

「そうですか。」

「君に今大事なことだけ伝えておくと、」

鍛冶山は少し間を開けて言った。

「奴は危険だ。君なら一瞬で殺される。死ぬのは嫌だろう？」

「ええ、まあ」

「なら少し協力してくれ。」

「……………」

「友達を助けるためにも君の協力が必要だ。」

「分かりました。」

五日は霧島に意識を向ける。

赤い？霧島の目は赤くなっていた。

充血などではない。もっともっと濃く深い赤に眼が染まっていた。

発動

「鬼人会の奴らが来ているとは聞いてたがまさかあいつだったとはな。」

「鍛冶山さん。あの人知ってるんですか？」

「ん？あああいつは割とこっちでは有名だからな。」

「有名？まあ確かにおかしい人ですけど。」

「あいつは危険人物なんだよ。それもとびつきりのな。」

冷めた声で鍛冶山さんが言う。

その手には二メートルあるつかと言うほど長く、波を打っている。

俗にいうフランベルジェというやつだろうか？

「君もあいつの危なさは分かるだろう。」

「はい。なんか表面上はそうでもないですけど、なんかキレるとヤ

バいっていうか、狂っているっていうか。」

まるで爆弾みたいな人だ。そういう感じだった。

「これはこれは《鉄の芸術家》まで来ちゃって、誰を連れて帰れば

いいか分からなくなっちゃいますね。」

おどけた口調で言うがそれは口調だけであり、実際は目はおろか口

さえ笑っていない。

「お前に連れて帰るものはない。」

きつぱりと言う鍛冶山さん。

「おやおや、冷たいですね。まああんまりもたもたしてると人が来

ちゃっても困るんでさっさと終わらせませうかねえ。」

霧島は水槽に手をかざし、釣り堀の水をすべて上空へ持ち上げた。

もちろん手はおろか、マジックの種になりそうなものは見つからな

い。

「う、ウソだろ!？」

大きな水の塊が宙に浮いている。水はゆっくりと時計回りに回っている。

目の前の光景に眼を疑った。

「傷はあんまり付けたくなかったんですが、まあ最悪生きてればいいでしょう。《鉄の芸術家》も連れて帰れば、少しは休暇とかももらえるんでしょうか？帰ってからののお楽しみですね。」

「かなり勝手なこと言ってますけどいいんですか？」

「あいつなら可能だ。俺と君が二人で戦っても勝てるかどうかは微妙だからな。」

「やっぱりあの強いですね。」

「ああ。俺の仲間も何人がやられてるからな。強さは折り紙つきの太鼓判だ。」

「あの、一応聞きますけどあれはマジックではないですよね？」

「あんなマジックが出来るやつがいたらお目にかかってみたいものだ。」

「そうですね。でもじゃあ、あれはどうやってるんですか？」

「細かい説明は今度してやる。とりあえず大事なことだけ言っておく。」

絶対にあいつの操ってる水に触れるな。あと不用意に近づくな。これだけだ。」

「はい、わかりました。」

「おまえ力はもう力は操れるか？」

「力って・・・」

「さすがに自覚しただろう？。お前にはそういう力があるんだよ。」

「あんまり認めたくはなかった。自分は普通ではないということを確認めたくなかった。出来れば何かの偶然ならばよかったのだが、どうやらそうはいかないらしい。」

「その力つてのがどんなのかイマイチ掴めないのによくわからないつてところです。」

「そうか。まあ詳しいことは本人しかわからないらしいが、お前は風を使えるつてのは確かだ。昼間はそれで飛ばされちゃったしな。」

「そうですか。自分では何が何だかさっぱりなんですけど・・・」
「なら不用意に使わない方がいいな。お前の友達を巻き込むこと
なるかもしれないからな。」その言葉が深く胸に突き刺さる。

「じゃあどうすれば？」

「とりあえず、お前は友達を一か所に集めてこれをかぶせとけ。な
いよりはましだと思う。」

そういつて鍛冶山はさっき引っこ抜いた鉄格子の一部をポケットか
ら取り出し（いつの間に入れたんだ？）それを変形させた。ピラミ
ッドみたいな形に。元の鉄格子から出来た割には大きく人が五、六
人は入れそうだった。

霧島が集めた水の球体は降ってきた雨を集めさらに巨大化し、回転
の速度は増していた。

不意に霧島が手を横に広げ、手を開くと水の球体がソフトボール大
位の大きさに分裂し、空中をふわふわしている。

「急げ！」霧島の水が激しく震え始めた。

鍛冶山の声に素早く反応し五日は愛花たちのところに駆け寄り、ピ
ラミッドを被せる。

続けて《池田屋》のおじさんのところに走り、ピラミッドまで担い
で、中に詰め込む。

これ以上中には入らない。しかしお巡りさん二人をほっておくわけ
にも行かないので、ピラミッドの後ろに非難させようとお巡りさん
のところを走りだしたところで、何かが五日の胴体に当たった。

「くっ。」

霧島の水だった。まるで引っ叩かれたかのような痛みが胴体に走る。
霧島の水はすぐにまた飛んできて、五日の体中にぶつかってくる。
こらえきれずに倒れた五日をさらに水が襲う。

駄目だ。よけきれない。体は濡れて重くなり、数も多すぎてよける
のは至難の業だ。

「がばあ！」

顔面に水の玉がヒットする。顔が後ろに吹っ飛ぶ。これはプロレス

選手にビンタされるくらい痛かった。

次が来る、そう思い顔を急いでかばう。が水はなかなか飛んでこない。

「ここは俺が何とかする！早くそいつらつれてけ。」

顔をあげると鍛冶山が大きな剣。熱を発し、赤く輝いていたフランベルジェで水を切り裂いている。

切り裂いた水はジュワつと音を立てて蒸発する。

「鍛冶山さん！」

「急げ！」

「はい」

重くなった体を起こしお巡りさん二人の首根っこを掴み引きずってピラミッドの後ろに避難させる。これで全員避難は終わった。鍛冶山の後ろに行く。

「これからどうするんですか？」

「どうにもできないな。」

「は？」

フランベルジェを振る手を休めずに答える。

「あいつの武器は水だから、本来なら全部蒸発させれば終わりなんだが、あいにくの雨でな。水がなくならない。」

「じゃあどうすんですか？」

「だからどうにもできない。」

「じゃあこのまま戦い続けて、体力尽きた所で連れてかれて終わりじゃないですか。」

「そうだな。」

鍛冶山が鼻でフツつと笑う。

「それを回避する方法が今なら一つだけある。お前の協力が必要不可欠だな。」

「その方法聞かせてください。」

こうして五日の人生初の《力》を使った闘いが始まった

告白

「な？簡単だろ？」

「けど、そんな方法でうまくいくんですか？」

「ああ」

「でも、僕がそこまでできるか……」

「大丈夫ちゃんとできる確信がある。」

自信満々に言う鍛冶山さん。

「……分りました。」

「行くぞ。」

そういつて霧島に鉄を変形させた手裏剣を投げつける。

ここまではさつきと変わらない。俺の仕事はこの先だ。

イメージ、イメージ。

>頭の中で描いたことは現実になると信じる。 <

五日は霧島の方に腕を強く突き出した。

もちろん五日の腕は伸びたりはしない。

その代わりに五日の手のひらから《風》が吹き出した。

その風は霧島の手裏剣を加速させ、さらに霧島が防御に使っている水の球体を霧散させた。

手裏剣を防ぐ水はなくなり、霧島の右腕を手裏剣が切り裂いた。

「くっ！こ、これは考えましたね。風を使って水を散らすとは。」

腕の傷口からは、ツーンと赤いしずくが垂れる。

雨は段々激しくなってきた時々目に入ってくる。

霧島は新たな防御用の水を用意してまた喋り始めた。

「これだけ増えれば問題ないでしょう？さすがにこの数を吹き飛ば

すのには無理が………
と、ここで鍛冶山さんが目で合図を送ってきた。
次の攻撃を仕掛けるらしい。

「んじゃないんでしょうか？」

霧島のおしゃべりが終わったのと同時に鍛冶山は持っている鉄を八つの手裏剣にして、投げつける。

狙いは体のど真ん中。

手裏剣は風を切り、目標に向かって突き進むが途中で水に絡まれ、停止してしまう。

「どうです？これなら手も足も出ないでしょう？おおっと失礼。これは手裏剣でしたね。（笑）」

「行くぞ。五日！」

「はい！」

掛け声を合図に鍛冶山は持っていた剣>フランベルジェ<を思いっきり霧島に向かってブン投げた。

正確には霧島が止めた>手裏剣入り水の球体<を狙って。

五日はさつきと同じようにはなく、できる限り範囲を絞って風を出し、回転しながら霧島へ向かっていく剣をさらに加速させた。

「なっ！」

剣>フランベルジェ<は霧島の前にある>手裏剣入り水の球体<の中の手裏剣を水の外に弾き出した。

水から解放され、弾かれた手裏剣が向かう先は霧島。どこに当たるかは運次第だが、水と霧島の距離はせいぜい一メートル。そんなには離れてはいない。

剣>フランベルジェ<に弾き出された手裏剣は三つ。そのうちの二つが右肩と左わき腹に刺さった。

そして最後には、鍛冶山が投げた、手裏剣を弾いた、剣>フランベ

ルジェ<

が霧島の左肩の鎖骨を切り裂く。

刃渡りがかなりある剣>フランベルジェ<が霧島に負わせた傷は大きかった。

霧島は左肩の傷をおさえて、地面に膝を突く。

空中を回っていた水の球体は、少しづつ形を留められなくなり、大粒の雨となって降ってきた。

「ぐう、やりますね。そんな攻撃の仕方があるなんて、さすがは《鉄の芸術家》。これも芸術のうちですか？君が考える攻撃の仕方にはいつも驚かされます。君みたいな人を才能があるっていうんでしょね。君の成長は本当に止まることを知らないんですね。」
そして霧島はニヤリと笑い、声のトーンを変えて言った。

「十一年前のあの」

「黙れ!!」

いきなり鍛冶山さんが言葉を遮った。

「その話をするな。本当に口数の多い奴だ。もうお前の負けだよ。その傷じゃ戦えないだろう。お前は負けたんだ。」

お前じゃ俺たちには勝てない。お前じゃ俺たちを殺すことはおるか、捕まえることすらできない。お前ここで捕まって、《エクセル》始末する。」

霧島はまたニヤリと笑った。どうしてこの状況で笑えるのだろうか？

「ははっ。捕まる？それはまた随分気が早いですね。」
霧島がまた喋り始めた。

「鍛冶山君。実はね、君にはまだ隠していることがあるんです。」
そして霧島はゆっくりとした口調でこう言った。

「僕が操れるのは水だけじゃないんですよ。」

着火

僕が操れるのは水だけじゃない。

そういつた霧島は開いた手の平を、多分愛花達をここまで運んだであらう車へと向けた。

車も操るのか、と身構えたが車自体は一ミリも動かなかつた。

しかし、頑丈な車の内部から《それ》は出てきた。

オレンジ色の液体だった。

「鍛冶山さん。なんですか、あれ？」

鍛冶山を横目で見ながら尋ねる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・多分、ガソリン」

「どうです？驚きました？でもこのままじゃイマイチ盛り上がり欠けるっつものですよ？だからこんなことをしてみました。」

そう言つて、ポツケに手をつ突っ込み、あるもの・・・・・・・・・・
ライターを取り出してガソリンに火をつけた。

ガソリンは激しく燃え上がり、暗くなってきた辺りを十分すぎるほどに明るく照らした。

「はぁーい。これでどうでしょう？楽しくありませんか？」

「楽しくねえよ。」

不意を突くように鍛冶山は手裏剣を一つ投げた。

しかし水と同様、ガソリンに阻まれ霧島の体には届かない。

「いけませんよ。鍛冶山君。不意打ちは。」

鍛冶山の投げた手裏剣は融点に達したのかドロドロの鉄になってアスファルトにこぼれおちた。

「これなら手裏剣もさほど怖くありません。さあそろそろ反撃ですね。」

と言って霧島は鍛冶山に手を向けた。

宙を浮いていたガソリンは鍛冶山めがけて直進した。

「鍛冶山さん!!」

鍛冶山は身構えガソリンに当たるギリギリのところまで横に大きく飛んで交わした。

しかしそんな避け方ではすぐに追撃が来るのではないかと思ったがそれはなかった。ガソリンは鍛冶山に避けられて途端速度を失い、地面に落ちた。

「やっぱりな。ガソリン操るの慣れてないんだろ?」

「ばれていましたか?」

と笑う霧島。

「いやあ、ガソリンとは相性が悪くてですね。水ほど器用に操れないんですよ。」

「でも!」

霧島はいきなり口調を強めた。

「だったら水も一緒に操れば問題ないんです。」

その台詞と同時に地面をぬらしていた水が再び霧島の周りに集まり始めた。

「五日!!逃げろ」

とつさに言われたその言葉に五日は反応できなかった。

「もう遅いですよ!」

五日の周りをぬらしていた水が五日の両足にまとわりついていた。急いで振り払おうとしたが脚が動かなかった。

「捕まえました。」

その瞬間。

五日の体はふわりと宙に浮かんだ。脚の方から。分かりやすく言うと空中に逆さづりだった。

「五日！！」

鍛冶山さんが上の方で叫んでいる。

しかし実際には上ではなく下だ。

逆さづりなのだから。

「あなたには少し大人しくしてもらいましょう。」

霧島はそう言くと五日に向けていた手を

池田屋のおじさんの家、もとい瓦礫の山へ向けた。

それと同時に五日は脚にひつついている水に引っ張られ、瓦礫の山に結構な速さで突っ込んだ。

五日の記憶はここで一時中断される。

終結

目をうつすらあけると、都会の濁った空が見える。

星なんかはほとんど見えずつまらない空だった。

というか、ここはどこなのか？自分は誰なのか？目覚める前の記憶などなどを順に思い出していく。

そして五日は飛び起きた。

目の前では忍者服姿と宅配便屋さんの恰好をした人が睨み合っていた。

自分の状況を見てみると、木片のやまのような場所に埋まっていた。

体全身が痛い。

右腕は太い木の下敷きになっているし、ふくらはぎには木の破片が刺さっている。

「ぐっ！」

動こうとしたが木が重すぎてどかすことができない。

そこへ鍛冶山さんが吹っ飛んできた。

「鍛冶山さん!!！」

「起きたか。」

「はい。それよりも鍛冶山さん大丈夫なんですか？」

「ダメかもな。勝ち目がない。手裏剣は投げても水で止められるし、剣投げたら炎で溶かされちゃって使いものにならなくなって。もう万策尽きたって感じた。」

「じゃあどうするんですか!？」

「どうにもできないな」

「そんな・・・」

「!」

「どうしました？」

「五日。お前の尻の下にあるのって」

「え? ああ」

言われて初めて気づいた。

僕の尻の下には鬼のマークが入った手裏剣とダイナマイトがあった。

「これって・・・」

「それがあるならいけるかもしれない。」

「ほんとですか？」

「ああ。ただし、チャンスは一回きりだ。」

「でも普通に投げても水で止められちゃいますよ？」

「そこが問題だ。いかに気づかれずにあいつにダイナマイトを喰らわせるかだ。」

「それは難しいですね。」

「俺に一つ策がある。」

「本当ですか？」

「ああ、でも説明している時間がない。お前は俺が合図をしたら、こいつを使ってあいつをしとめるんだ。できるか？」

「はい。やります。」

「もう一度言うがチャンスは一度きりだ。頼んだぞ。」

そう言って、鍛冶山は立ち上がり自分の足元にあった金庫を手裏剣に変えた。

「お前は後ろから回りこめ。」

「はい。」

「大丈夫ですかー？鍛冶山君に五日くん。まさか死んでませんよね？死ぬのはよしてくださいね。怒られるのは何度も言っように僕なんですから。って聞いてます？」

「聞いてねえよ！！」

鍛冶山は手裏剣を投げた。今回の手裏剣は小さかった。

五日は走って霧島の後ろに回り込んだ。

ここで鍛冶山が手裏剣を小さくした理由が分かった。鍛冶山の目的は霧島が操っている水をすべて水に使わせること。

火では手裏剣を防ぐことができない。

そしてもう一つの目的は五日への攻撃手段に火を使わせること。

いくらダイナマイトでも火がついていなければ意味がない。

五日は霧島の火に体から突っ込み、火だるまになりながら霧島に突進した。

「なっ！？」

霧島がその場から数十センチ離れたところに倒れた。

その瞬間霧島の操っていた水と火が重力に従い地面に落ちた。

「やっぱりな。霧島、お前の力の発動条件は動かないこと。お前は
この戦い中、一歩も動かなかった。今までお前と戦った時は築く暇

すらなかった。この戦いに勝てたのは五日のおかげだ。そしてお前はここで終わりだ。《アイアンキューブ》!!!」

鍛冶山は金属を立方体に変形させた。

中に霧島を閉じ込めて。

「ふん。これがどうしたと言っているのですか？僕を閉じ込めても何の解決にもなりませんよ？」

「今お前の服にダイナマイトを仕掛けた。」

「なっ！これは!？」

「お前もよくご存じ《鬼ちゃん印のダイナマイト》。お前のこの製品だろ。」

「クソ!。出せ!出しやがれ!！」

「終わりだ。霧島。あばよ」

「くっそーーーーー!。僕がこんなところでーーーーーッ!」

その言葉と共に僕たちの戦いは幕を閉じた。

終結（後書き）

今回はこのような駄作を読んでいただけで誠にありがとうございました。

この作品はとりあえず終わりますが次も五日かけたならなと思います。

ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8134/>

普通な君を取り巻く風

2010年10月9日15時11分発行